

週日の説教

金 大烈 神父 2008年8月28日(木)

《善く生きて神様を待ちましょう》

今日の福音(マタイ 24・42-51)のテーマは、忠実な僕と不忠実な僕のたとえです。忠実な僕になる、ならない、の基準は何でしょうか？ 今日、イエス様がおっしゃった言葉から考えると、“どのような姿勢で待つのか”ではないかと思われます。正しい姿勢で待てるかどうかを見て、忠実であるかどうか判断できると話されたのではないのでしょうか。

では、正しく待つとはどういうことでしょうか？ 大体私たちは、“待つ”ことを耐えること、我慢すること、難しくても何とかしなくてはならないこと、と考えています。そのような重い感じの“待つ”ことが多いのではないのでしょうか？ しかし、“正しく待つ”というのは、今、ここで、よく生きることです。いつ来るのか分からないからと、ただぼんやり生きるのではありません。キリスト教の“待つ”ことはとても積極性を持ちます。ただ、“…をしないように”と気をつけることではなく、積極的に何をしなければならないか考え、自分がなすべきことを今、ここで 行い、生きている証拠を見せることです。それが、今日、イエス様のおっしゃったテーマの中心ではないかと思えます。

信者の方々が毎日ミサに与って、どのくらい喜びを感じているか、また、ミサに与る人が少ないのは、喜びを感じていないために積極的にミサに与れないのではないかと、気になっています。“ただミサに与る”、“ただ教会の教えについていく”のではなく、喜びがなくてはならないと思えます。喜びで、“このミサを捧げなくてはならない”と思えるようになることが大切です。喜びにもいろいろありますが、会いたいものに会うために待たなくてはならない気持ち。だから早く時間が過ぎてほしい。そういう待ちかねる気持ちで準備する姿が美しいと思えます。それが積極的にミサに与るというものです。

そういう気持ちで過ごす信仰の生活は、絶対にその人に喜びを与えます。結局、信仰は、味わうことなのです。

「あなたの喜びを味わわせてください、味わうことができるように導いてください」、そのように祈れるようになったら、自然に信仰の喜びを感じられると思えます。

考えてみてください。皆様に影響を受けて洗礼を受けた人は、何人いるのでしょうか？ 忠実な僕になるためには、自分だけの救いではなく、自分が味わった喜びの味を人に伝えなければなりません。それが、僕である私たちの大きな義務であり喜びなのです。

各自の人生の終わりは、いつ、どろぼうのように突然、私たちのところへ来られるか分かりません。私たちは、裸の姿で迎えるかもしれないし、喧嘩をしながら迎えるかもしれません。何かについて痛みながら迎えるかもしれません。そしてとても大きな喜びで神様をたたえながら迎えるかもしれません。

できるだけ、一番いい姿で神様を迎えようと準備することが、結局この世界でよく生きることです。この気持ちを保ちながらミサを捧げましょう。

ありがとうございました。